



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

29

芥川龍之介

中央公論社

芥川龍之介

昭和39年10月5日初版発行

昭和49年5月31日3版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 有限会社美濃羽製函所
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

羅生門

9

鼻

16

孤独地獄

23

虱

26

酒虫

31

芋粥

38

手巾

54

偷盜

62

或日の大石内蔵助

112

戯作三昧	121
首が落ちた話	145
袈裟と盛遠	153
蜘蛛の糸	162
地獄変	166
開化の殺人	194
奉教人の死	203
枯野抄	214
きりしとほろ上人伝	223
蜜柑	236
舞踏会	240

尾生の信

秋

黒衣聖母

南京の基督

杜子春

秋山図

藪の中

トロツコ

六の宮の姫君

お富の貞操

一塊の土

246

248

259

264

276

286

294

304

309

317

327

大尊寺信輔の半生

海のほとり

湖南の扇

玄鶴山房

蟹気楼

河童

齒車

或阿呆の一生

西方の人

続西方の人

或旧友へ送る手記

注 解
説 年 譜

大岡昇平

531 516 495

口 絵
挿 画

「杜子春」

小穴隆一

「羅生門」「鼻」「芋粥」「偷盜」

「戲作三昧」「袈裟と盛遠」「地獄変」

「奉教人の死」「枯野抄」

「きりしとほろ上人伝」「藪の中」

「六の宮の姫君」「河童」

杉本健吉

「蜘蛛の糸」「南京の基督」「お富の貞操」

「盛気楼」

小穴隆一

芥川龍之介

羅生門

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剝げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

なぜかという、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とかいう災いがつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐

狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くという習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪がって、この門の近所へは足ぶみをしないことになってしまったのである。

そのかわりまた鴉がどこからか、たくさん集まつて来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襦の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一

通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」というよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」という方が、適當である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下がりからふり出した雨は、いまだに上がるけしきがない。そこで、下人は、何を措いてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあという音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めにつき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでゐるではない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度と同じ道を低徊したあげくに、やっとこの局所へ逢着

した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないということ肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後にくたるべき「盗人になるよりほかに仕方がない」ということを、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹きぬける。丹塗りの柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、緋の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の思えない、人目にかかる惧れのない、一晚楽にねられそうなどころがあれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子のいちばん下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をち

ぢめて、息を殺しながら、上の容子^{ようす}をうかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚^{ひげ}の中に、赤く膿^{うみ}を持った面皰^{めんぽ}のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくっていた。それが、梯子を二三段上がってみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこごと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々^{すみずみ}に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮^{しうきう}のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、いちばん上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平らにしながら、頸^{くび}を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いてみた。

見ると、楼の内には、噂^{うさ}に聞いた通り、幾つかの死骸^{しかい}が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いた

り手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久に啞^おのごとく黙っていた。下人は、それらの死骸の腐爛^{ふらん}した臭気に思わず、鼻を掩^{おほ}った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚^{きうかく}を奪ってしまったからである。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色^{ひがわいろ}の着物を着た、背の低い、瘦^{やせ}せた、白髪頭^{しろがみかぶ}の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時^{せんじ}は呼吸^{きそく}をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子の尻^{しり}をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心

からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に對すると言つては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる惡に對する反感が、一分ごとに強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、餓死をするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、おそらく下人は、なんの未練もなく、餓死を選んだことであろう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上がり出していたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪を毛を抜くかわからなかった。従つて、合理的には、それを善惡のいずれに片づけてよいかわからなかった。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪を毛を抜くということが、それだけですでに許すべからざる惡であつた。もちろん、下人は、さっきまで自分が、盗人になる氣でいたことなどは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのはいうまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、あわてふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こゝろ罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、啞のように執拗く黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎惡の心を、いつの間にか冷ましてしまつた。あとに残つたのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老



婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう言った。

「己は検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分この門の上で、何をしていたのだから、それを己に話さねすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、いっそう大きくして、じつとその下人の顔を見守った。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わつて来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、髪にしようと思ふたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、ひややかな侮蔑といつしよに、心の中へはいって来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持ったなり、囊のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言つた。

「なるほどな、死人の髪を毛を抜くということは、なん

ぼう悪いことかも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと言つて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんだら、今でも売りに往んでいたことである。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいというて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つていたそうなの。わしは、この女のしたことが悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじやて、しかたがなくしたことである。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これともやはりせねば、餓死をするじやて、しかたがなくすることじやわいの。じやて、そのしかたがないことを、よく知つていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大体こんな意味のことを言つた。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いていようちに、下人の心には、ある勇氣が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上がつて、